「クルド人」と「公共圏」
――「在外クルド人」の展開と分断横断的なメディア空間の登場

髙橋誠一
（法政大学大学院社会学研究科）

はじめに

本稿の主題は、1980 年代以降の「クルド人」の国外への移動（＝「在外クルド人」[1] の展開）と電子メディアを中心とした越境的なメディア空間の登場を「公共圏」の創成という観点から考察することである。「在外クルド人」の展開と越境的なメディア空間の登場は、トルコ、イラク、イランに分断され、各国家においてマイノリティとして包摂されている「クルド人」にとって、分断状況を克服する契機と「場」を提供するものとして理解される。本稿では、そのような分断横断的な「空間」を「公共圏（public sphere）」と「公共性（publicness）」という観点から考察するものである。

１．「クルディスタン」の分断と「クルド問題」の個別化

１－１．「クルド人」と「クルディスタン」

「クルド人」は、中東においてトルコ人、ペルシア人、アラブ人に次ぐ人口をもつ人々とされ、独自の国家をもたない最大のナショナル・マイノリティとして理解されている。現在の総人口はおよそ 30,000,000 人から 40,000,000 人と推定されているが、「クルド人」に関する公式の統計が存在しないために、正確な人口を把握ないし確定することはできない[2]。

表１　「クルド人」人口

Country	Total Population	Kurds	Percentage of Population
Turkey	72,060,000	12,000,000-15,000,000	16-20%
Iraq	27,100,000	5,000,000	18%
Iran	70,420,000	11,000,000-12,000,000	15-17%
Syria	18,360,000	1,000,000-2,000,000	5-10%
Elsewhere		1900000-2,040,000	
	Total	31,000,000-39,000,000	

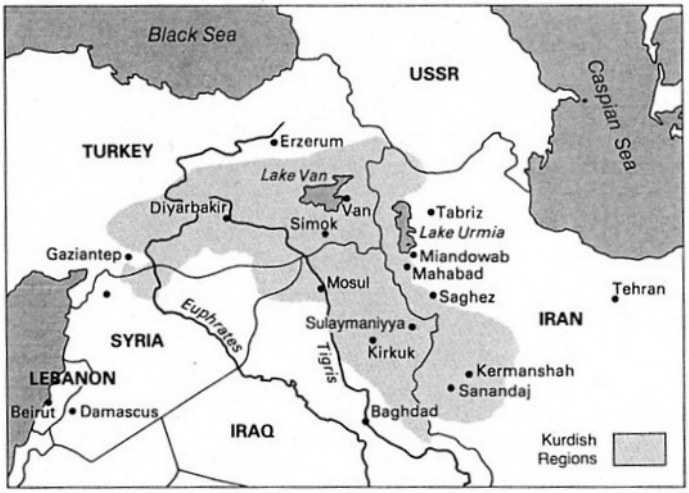
出典：The Cultural Situation of the Kurds, 7 July 2006.をもとに作成

「クルディスタン」は、地理的には中東の中央に位置し、チグリス・ユーフラテス川の中上流域に広がり、アナトリア高原、ザグロス山脈、タウルス山脈などを抱える山岳地帯である。「クルド人」は「クルディスタン（＝クルド人の土地）」とよばれる地域に歴史的に居住してきたとされているが、正確な起源は定かではない（White,2000:14）。しかしながら、1596 年には「クルド」に関する歴史書である *Sharafnameh* が Sharaf Khan によって著されており、*Sharafnameh* の存在はナショナリストによる歴史的存在としての「クルド人」の正統性を訴える「言説」に利用

されている。また、19 世紀にはイギリス、ドイツ、フランス、イタリア、ロシアなどのヨーロッパ諸国の間で「クルディスタン」という地理的概念に関する共通の理解がもたれているが指摘されている（O'Shea,2004:17）。

16 世紀以来の「クルディスタン」は、サファヴィー朝やオスマン帝国による被支配地域であったが、険しい地形や競合する帝国間の緩衝地帯として機能したこともあり、常に関心のおかれる地域ではありつつも、支配のおよばない周辺地域として位置づけられてきた（O'Shea,2004:14）。

図 1　「クルディスタン」



出典：Mostyn ed.（1988:463）

１－２．クルド国家建設の失敗と分断

中東においてネイション意識が萌芽し、国家建設を目的とする政治運動としてのナショナリズムの機運が高まるのは、19 世紀後半から 20 世紀の初頭にかけてである。背景には、主にイギリスやロシアといった当該地域に国際関係上の利害関心をもつ大国によってネイション概念が導入され、多くのナショナリズム運動が支持されたことがあげられる（Olson,1989）。「クルド人」も例外になく、19 世紀の後半から 20 世紀の初頭にかけて急速にネイション意識が普及するとともに、国家建設を掲げた政治的蜂起も急増することとなる。

しかしながら、この時期のクルド・ナショナリズムの多くは、独立国家建設を掲げながらも、その運動の性格は部族性や宗教性が色濃く反映されたものであり、「クルド人」や「クルディスタン」を包括的に巻き込んだ統一的な運動が展開されることはなかった（Bruinessen,1992; Natali,2005; Olsen,1989; White,2000）。また、運動自体も散発的で複数の異なる利害目的が混同したものであった（Olsen,1989）。

クルド・ナショナリズムの部族性や宗教性、そして包括的で統一的な運動の欠如が指摘される一方で、第一次大戦後のセーヴル条約にはクルド独立国家案が盛り込まれており、クルド国家の設立は現実的な可能性をもっていたといえる。しかしながら、1923 年に締結されたローザンヌ条約では、クルド独立国家案は反故にされ、逆にトルコ、イラク、イラン、シリア、旧ソ連領に分割されることが決定した。

しかしながら、第二次世界大戦後の 1946 年にイラン北西部のマハバドにわずか一年に満たない期間であるが、「クルディスタン共和国」（通称、マハバド共和国）が設立されており、当該地域における国家形成がきわめて流動的であり、ナショナリズム運動の成否や、ましてや民族自決原理の適用などではなく、大国の利害という別の力学が大きく作用していたことは明らかである。

１－３．「クルド問題」の個別化

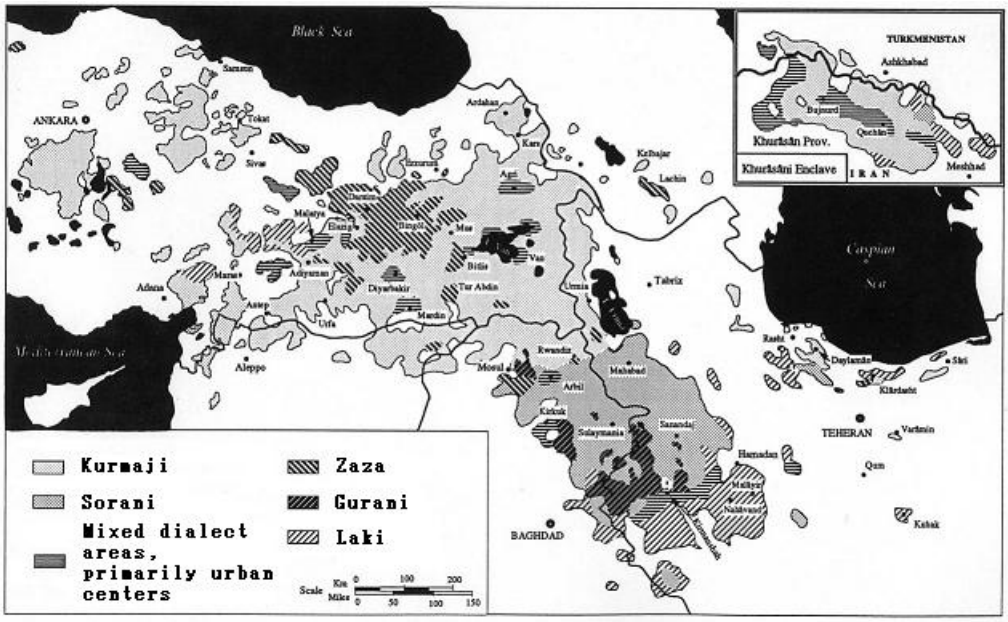
今日における「クルド人」をめぐる複雑で個別的な問題構制の諸因は、「クルディスタン」の分割に起因するものであると考えられる。つまり、ローザンヌ条約による「クルディスタン」の分割は、単に領土の地理的な分割以上の意味を「クルディスタン」と「クルド人」にもたらしたといえる。以下では、「クルディスタン」の分割によってもたらされた問題を次の三点を中心に整理したい。

一点目に、「クルディスタン」の分割が意味するのは、分割後の諸国家による政治的な分断である。国家間の分割によって「クルド問題」は、各国家における内政問題、各国家の協調的な封じ込めとしての地域問題、ないし多くの利害が絡む国際政治上の問題として構成され、政治化されてくることとなる。つまり、複数国家による政治的な分断は、「クルド問題」を各国家における個別的な問題（＝マイノリティ問題）として構成してきたといえる（Natali,2005）。

二点目に、分割後に包摂される国家による社会的、文化的な分断があげられる。トルコ、イラク、イランといった各国家は、国境線を隣接しているとはいえ社会的にはきわめて異質な国家である。トルコは、「近代化」と「西欧化」を建国以来の国家理念とし、世俗主義、民族主義と共和主義を厳格に推し進めてきた国家である。イラクは、「クルド人」とは異なるアラブ人が多数派を占める国家であり、1979 年からは Saddam Hussein による独裁国家であった。イランは、「クルド人」と同じアーリア系のペルシア人が多数派を占める国家であるが、宗教的には 90%以上がシーア派であり、スンニ派の「クルド人」は少数派とされる。つまり、「クルディスタン」の分割後、「クルド人」はそれぞれに異質な国家にマイノリティとして内包され、政治的にだけでなく社会的にも同化や抑圧または差異化の対象とされてきたのである [3)]。

「クルディスタン」の分割による社会的、文化的な分断が特徴的にみられる例として、本稿では言語に焦点をあて問題の複雑さを指摘したい。「クルディスタン」では分割以前より、標準化されたクルド語は存在せず、そもそも多様なクルド語方言が使用されていた。

図 2　「クルディスタン」における方言分布



出典：Izady（1992:171）

クルド語は、「クルディスタン」とほぼ同等の分布範囲をみせるが、クルマンジー語（Kurmanji）とソラニ語（Sorani）という主流な二大方言と、ザザ語（Zaza）、グラニ語（Gurani）、ラキ語（Laki）などのいくつかの小さな方言へと分類することができる。方言間の相互の関係については、日常的なコミュニケーションに関しては相互に半分程度の理解が可能であるというのが一般的な見解である（Izady,1992:170; O'Shea,2004:154）。分割後の各国における主要な方言は、トルコではクルマンジー語およびザザ語、イラクとイランではソラニ語が用いられている。

しかしながら、トルコでは 1991 年に部分的な解除が認められるまで公用語としてのクルド語が禁止されていたため、必ずしも「クルド人」がクルド語を使用できるわけではない。また、トルコにおけるソラニ語地域やイラクおよびイランにおけるクルマンジー語地域の存在が示すように、方言の分布は国境線とも必ずしも一致しないものである。

加えて、分割によるア・ポステリオリな問題として指摘されるのは、言語の表記に関する問題である。クルド語の表記に関しては、1923 年以来のトルコではラテン文字が、イラクではアラビア文字が、イランではペルシア文字が、旧ソ連圏ではキリル文字がそれぞれ使用されている。つまり、以上のことから指摘されるのは、「クルディスタン」における言語をめぐる問題は、多様な方言の存在、方言と国境の不一致、国家によって表記文字が異なるというきわめて複雑な問題構制をしているとともに、文字を媒介としたコミュニケーションが非常に困難であるという点である。

三点目に、国家間における人の流動性の分断があげられる。トルコ、イラク、イランは、ともに国境を接しているにもかかわらず、国家間での人の移動は盛んではない。国内の都市やヨーロッパをはじめとした国外へと流出する「クルド人」はいるものの、「クルディスタン」の内部における流動的な人の移動は欠如しているといえる。つまり、分割後の「クルディスタン」は、実践的な意味での「地域」ないし「社会空間」としての一体性を完全に喪失してしまったといえる。

以上の三点を「公共圏」という観点からとらえるならば、端的には「クルド人」にとっての「公共圏」の不在と分断として理解することができるであろう。つまり、各国家内におけるマイノリティとして包摂された「クルド人」は、それぞれの国家における「公共圏」から排除される存在として、または支配的な「公共性」を共有できない存在として位置づけられてきたといえる。また、異質な国家による分断と流動性の欠如は分断状況の固定化と補完関係にあり、分断状況を克服するような「公共圏」もまた形成されてこなかったといえる。

本稿の中心的な論題は、このような「クルディスタン」の分断に起因する「クルド人」にとって「公共圏」の分断と不在に対し、1980 年代以降の「在外クルド人」の展開と越境的なメディア空間の登場が「クルド人」にとっての「公共圏」という文脈においてどのようなものとして理解され、位置づけられるのかを考察することである。

２．「在外クルド人」の展開と分断横断的な組織・ネットワークの形成

２－１．「在外クルド人」の歴史的展開

「クルド人」の国外（ないし「クルディスタン」の外部）への移住ないし移動の歴史は、かなり古くまでさかのぼることができる。たとえば、12 世紀にはアイユーブ朝のもとで、大量の「クルド人」がエジプトやシリアに移住した（Sheikhmous,1990:89）[4)]。また、18 世紀の後半から 19 世紀にかけては、オスマン帝国とサファヴィー朝による政治的な強制移動もたびたび行われた（Sheikhmous,1990:90）。他にも、エジプト、イギリスやロシアなどへの学生および知識人の留学や、政治運動家の在外活動も歴史的にみられる（Sheikhmous,1990:92）。

しかしながら、かつてないほどの規模で「クルド人」の大量移動が展開され、「在外クルド人」

の人口が拡大したのは 1960 年代以降であるといえる。以下では、1960 年代以降の「在外クルド人」の歴史的展開を、五つの時期ないし特徴に分けて概観する。

第一の展開は、1960 年代から 1970 年代にかけて急増するトルコからの大量の労働移民である。特に、ドイツ、フランス、オランダといった国々は、労働力不足解消のためトルコとの間に雇用協定を結び、積極的に移民労働者を受け入れた。なかでも、ドイツは 1961 年から新規の移民受け入れを停止する 1973 年まで、1,000,000 人を超えるトルコ人を *Gastarbeiter* として受け入れた。このような大規模な国際労働力移動の流れの中で、かなりの数の「クルド人」がトルコからの労働移民として国外へと流出していった[5)]。また、1973 年のオイル・ショック以降は新規の移民受け入れは停止されるものの、その後も家族呼び寄せなどによる国外への人口移動は続くこととなる。また、家族呼び寄せによる移民の女性化や定住化にともなう新たな社会問題の存在についても指摘しておきたい。

第二の展開は、1980 年にトルコで起きた軍事クーデターによる亡命者である。クーデター自体の性格は、「クルド人」に限らない国内の反体制勢力の鎮圧と牽制であり、政治的、経済的な安定化を目的としたものであったが、多くの「クルド人」活動家やジャーナリスト、さらに知識人が投獄された。また、クーデター後の 1982 年に制定された現行憲法以降は、「クルド人」への取り締まりは一層厳しくなり、特にクルド政党である PKK（Kurdish Workers Party）[6)] と軍との激化する対立の中で、多くの「クルド人」が亡命ないし難民として国外へと流出することとなった（Bruinessen, 2000）。

第三の展開は、1979 年のイラン革命による亡命者と難民である。1979 年のイラン革命では、「クルド人」はスンニ派でありながらも革命を支持、協力し、革命後には事実上の自治（de fact autonomy）を希求した。しかしながら、Khomeini 政権は「クルド人」の自治要求を認めず、さらに反革命勢力として「クルド人」を厳しく弾圧した。この一連の弾圧により、多くの「クルド人」がトルコをはじめとした国外へと亡命ないし難民として流出することとなった（Bruinessen 2000; Wahlbeck 1999:56-8）。

第四の展開は、1980 年代から 1990 年代にかけて、イラクから流出する大量の難民である。1980 年代以降のイラクからの大量の難民の発生は、大きく分けて三つの契機に分けることができると考える。一つ目は、1980 年にはじまるイラン・イラク戦争である。二つ目は、1987 年から 1989 年にかけて Saddam Hussein 政権が国内の「クルド人」に対し行ったアンファル・キャンペーンとよばれる大量虐殺である。アンファル・キャンペーンでは、非戦闘員である一般市民が対象とされ、大量の化学兵器も用いられた。なかでも、1988 年の Halabja では 5,000 人以上の死者が出たとみられている（Wahlbeck 1999: 52）。三つ目は、1990 年のクウェート侵攻を機にはじまる湾岸戦争である。1980 年代以降にはじまる一連の流れは、イラク国内における治安の悪化と「クルド人」への激しい弾圧をともない、大量の難民を発生させた（Bruinessen 2000; Wahlbeck 1999: 52-3）。

第五の展開は、冷戦の終焉による旧ソ連圏からの「クルド人」の流出である。旧ソ連圏からの「クルド人」の展開に関しては次の二つの特徴を理解しておくことが重要である。一つ目は、旧ソ連圏から流出した「クルド人」は、トルコ、イラク、イランからの労働者や難民に比べて、ソ連崩壊以前の亡命者も含め、教育程度の高い知識人層が多くみられるという点である。二つ目に、旧ソ連から流出した「クルド人」は、主にクルマンジー語を使用する人々であるという点である。このことが重要な意味をもつのは、西ヨーロッパ在住の「在外クルド人」のおよそ 85%がトルコ出身であることをふまえ、「在外クルド人」のかなりの割合がクルマンジー語話者であることが指摘される（Bruinessen,2000; Hassanpour,1992:164-6; The Cultural Situation of the Kurds,7 July 2006）。

表 2　「在外クルド人」人口と分布

Country	Population
Germany	700,000-800,000
France	120,000-150,000
UK	80,000-100,000
Sweden	80,000-100,000
Holland	70,000-80,000
Switzerland	60,000-70,000
Austria	50,000-60,000
Greece	20,000-25,000
Belgium	10,000-15,000
Denmark	8,000-10,000
Norway	4,000-5,000
Italy	3,000-4,000
Finland	2,000-3,000
USA	15,000-20,000
Canada	6,000
Turkmenistan	40,000
Azerbaijan	150,000
Armenia	45,000
Georgia	60,000
Afghanistan	200,000
Lebanon	80,000

出典：The Cultural Situation of the Kurds, 7 July 2006.をもとに作成

２－２．コミュニティの分断と分断横断的な組織・ネットワークの形成

1960 年代以降の「在外クルド人」の急増にともない、移住ないし移動先においてさまざまなコミュニティや組織およびネットワークが形成されていることは、多くの先行研究においても指摘されている（Bruinessen,2000; Emanuelsson,2005; Griffiths,2002; Wahlbeck,1998,1999）。

ただし、「在外クルド人」のコミュニティ [7] を中心的な問題関心とした研究は必ずしも多くなく、Griffiths と Wahlbeck によるロンドンの事例が代表的なものとしてあげられる（Griffiths, 2002; Wahlbeck,1998,1999）。Griffiths と Wahlbeck の議論を整理すると、本稿において注目すべき問題は以下の三点である。

一点目に、「在外クルド人」コミュニティの地理的な分布に関してである。トルコ出身の「クルド人」コミュニティ [8] の多くはロンドン北部に、イラク出身の「クルド人」コミュニティはロンドン西部に集中している一方で、イラン出身の「クルド人」は単一での大規模なコミュニティを形成していない（Griffiths,2002:86-88; Wahlbeck,1999:73）。

二点目に、一点目をふまえ、ロンドンにおいて出身国の異なる「クルド人」によって構成された統一的な「在外クルド人」コミュニティが存在しないことが指摘されている。つまり、それぞれのコミュニティは、出身国ごとに形成されており、「クルディスタン」と同様にロンドンにおいても分断状況がみられるのである（Griffiths,2002:128; Wahlbeck,1999:162-3）。その主な理由として Wahlbeck は、言語（方言）上の差異とコミュニティにおける政治的文脈の差異を指摘して

いる（Wahlbeck,1998:218）。つまり、言語（方言）間のコミュニケーションの問題と異なる政治的文脈をもった出身国との政治的紐帯による差異が、ロンドンにおける分断を構成しているといえる。

三点目に、「在外クルド人」のアイデンティティの表象ないし自己理解に関してである。Wahlbeck によれば、一般にイラクおよびトルコ出身の「在外クルド人」が、「クルド人」としての表象と自己理解を強調する一方で、イラン出身の「在外クルド人」は、自らの中での「クルド人」としての表象と自己理解は相対的に低いものであるといえる（Wahlbeck,1999:113）。

Griffiths と Wahlbeck による分析は、ロンドンという具体的な都市を対象としたものではあるが、両者によって指摘されている特徴は他の地域や都市にもあてはまる一般的な傾向であると考えられる。つまり、在外空間（＝「クルディスタン」を内包する国家の外部）におけるコミュニティの形成は、かなりの部分で「クルディスタン」における分断状況を反映したものであるといえる。

以上で概観したように、「在外クルド人」のコミュニティにおける分断が指摘される一方で、1970 年代の後半から 1980 年代以降に形成される組織やネットワークには、分断状況を克服するようなさまざまな試みもみられる（Emanuelsson,2005）。以下では、「在外クルド人」の代表的な組織を概観した後、その特徴について整理したい。

「在外クルド人」の代表的な組織として最初にあげられるのが、1979 年にドイツで設立された KOMKAR（Union of Worker’s Associations from Kurdistan）である。KOMKAR は、トルコ出身の「クルド人」学生および労働者を中心として設立され、現在ではドイツ国内の 35 の団体に加え、国外の 12 におよぶ組織や団体とも提携を結ぶ非常に大きな組織である（Emanuelsson, 2005:100）。ドイツにおける KOMKAR を皮切りに、1981 年にはスウェーデンに KR（Federation of Kurdish Associations in Sweden）が、1983 年にはフランスに IKP（Kurdish Institute of Paris）が、1985 年にはロンドンに KCC（Kurdish Cultural Center）が、1991 年にはドイツで IMK（International Association of Human Rights of the Kurds）が、それぞれ設立されている。日本でも 2003 年に埼玉県蕨市において、クルディスタン&日本友好協会（Japanese-Kurdistan Friendship Association）が設立されている。「在外クルド人」組織の正確な数を把握することはできないが、今日では世界中で 100 を超える組織が存在していると考えられる。1980 年代以降から急増する「在外クルド人」組織の特徴としては、以下の三点を指摘しておきたい。

一点目に、「在外クルド人」組織の主要な活動分野は、労働、教育、文化、人権などである。1970 年代後半以降、トルコ出身の労働移民にとって移住先における労働問題は、個人やコミュニティを越えて展開されるようになる。また、言語教育は「在外クルド人」にとって中心的な関心の一つであり、各国において禁止ないし抑圧されていたクルド語の習得やクルド語による教育も、在外空間においてはきわめて活発に行われている[9)]。そして、「在外クルド人」組織の活動において、文化的権利とならび中心的な関心を構成しているのが人権である。Emanuelsson は、IMK をはじめとする人権問題を争点としたさまざまな組織による活動から、在外空間において展開される「クルド人」の新たな可能性を分析している（Emanuelsson 2005）。

二点目に、多くの組織が教育や文化などを主要な活動とする一方で、出身国におけるクルド政党との直接的ないし間接的な政治的結びつきも多く指摘されている（Bruinessen,2000; Emanuelsson,2005; Wahlbeck,1998, 1999）。つまり、「在外クルド人」組織の多くが、出身国における政治運動やその影響力から必ずしも自由ではないといえる。Wahlbeck によれば、たとえば家やコミュニティ・センターそして *Newroz* において出身国ごとに異なるシンボル（政治ポスター、指導者の写真、旗）が用いられていることが指摘されている（Wahlbeck,1999:159-60）。

三点目に、1980 年代以降に形成される「在外クルド人」組織の多くが、出身地の異なる「クル

ド人」の統一を目指している点である（Emanuelsson 2005: 100）。特に、出身国の異なる「クルド人」を統合していくこと、在外空間における言語的多様性をさまざまなかたちで克服していくことは、1980 年代から 1990 年代を通じた一つの大きな課題であったといえる[10)]。

以上のコミュニティと組織の形成と展開をふまえ、次に相互の結びつきとしてのネットワークについて考察したい。1980 年代後半から 1990 年代に入るとさまざまな「在外クルド人」組織において活動の拡大と相互の協力や提携がみられるようになる。たとえば、現在では多くの組織が機関紙、雑誌やニューズレターを発行している。また、複数の組織による大規模な会議も多数開かれるようになる。たとえば、1989 年には IKP を中心に、フランスの NGOs や KR および KCC などが共同で国際人権会議を開催している（Emanuelsson,2005:126）。さらに、1995 年にはクルド亡命者議会（The Kurdish Parliament in Exile）がオランダで開かれ、その後もオーストリア、デンマーク、ロシア、イタリアなどで開催された。

このようなローカルな地域を越えた活動や運動の中で、人権をめぐる問題は「クルド人」にとっての共通の問題関心として、中心的な役割を担うものである。Emanuelsson は、1980 年代のイラクにおける「クルド人」の大量虐殺により高まった「クルド」に対する国際的な関心と今日の人権規範の高まりに着目し、1980 年代後半から活発に展開される人権ネットワークについて分析している（Emanuelsson,2005:125-75）。

２－３．「在外クルド人」と在外空間

1960 年代から急増する「在外クルド人」の人口は、現在ではおよそ 1,900,000-2,040,000 人にのぼるとみられる。また、1980 年代以降には、さまざまなコミュニティ、組織、ネットワークが形成され、在外空間を構成しているといえる。しかしながら、本稿が着目するのは、「在外クルド人」や在外空間の形成と展開における数や規模といった側面だけではない。

以下では、「クルディスタン」における分断状況を克服するような新たな可能性の「場」として、「在外クルド人」と在外空間がもつ意味や機能について考察したい。たとえば、Natali も指摘するように、「在外クルド人」と在外空間の存在は、政治空間の分断によって個別的に展開されてきたクルド・ナショナリズムや「クルドらしさ（Kurdishness）」に対し、新たな可能性と再編成を迫る契機として理解され、位置づけられている（Natali,2005:160-79）。在外空間が新たな可能性の「場」として着目される理由としては、主に次の三つがあげられる。一つ目に、在外空間はトルコ、イラク、イランにおける抑圧ないし限定的な言論状況に対し、自由な言論活動を可能にする言論空間としての機能をもっているといえる。二つ目に、在外空間は「クルディスタン」の分断状況に対し、自由な移動と流動性を可能とする空間であるといえる。三つ目に、在外空間は個人および集団に対し、アイデンティティの再構成を迫る空間であるといえる。より正確には、アイデンティティの再構成は二重の過程を内包しているといえる。まず、第一に外国人として、他者として、「クルド人」としてという受け入れ社会との大きな差異にもとづく自己理解である。次いで、第二に出身国やジェンダーといった「クルド人」内部の差異にもとづく自己理解である。とりわけ、在外空間のもつ意味の重要性としては、「クルド人」内部の差異を明らかにし、そのような差異を表明することを可能とする「場」であるということがきわめて大きい。

３．分断横断的なメディア空間の登場――電子メディアが切り拓く新たな可能性

３－１．衛星テレビの登場による越境的なメディア空間の登場

「クルド人」にとっての分断横断的なメディア空間の創出という意味において、もっとも革新的な影響をもたらしたのは、衛星テレビである MED-TV の存在である。越境的なメディアとし

ての衛星テレビの特徴は、一般に次の五つのように理解される。一つ目に、衛星テレビは、同時性をもち、不特定多数のオーディエンスを対象とした電子マスメディアである。二つ目に、電波メディアである衛星テレビは、国家による物理的な管理や制約を受けにくい媒体であるといえる。三つ目に、衛星テレビは、かなり広い放送版域を獲得することが可能である。たとえば、MED-TV の放送版域は、ヨーロッパを中心として西アジアと北アフリカまで広がる地域である。四つ目に、衛星テレビのメディアとしての特徴は、視聴覚的（audiovisual）であることにより、印刷メディアやラジオよりも「リアリティ」を感じさせることが可能なメディアとして効果的であるといえる（Hassanpouur,1998:53）。

MED-TV は、1994 年 10 月にイギリスでライセンスを取得して設立された、「クルド人」による衛星テレビである。ただし、MED-TV は 1999 年 4 月にライセンスを剥奪されており、現在は活動を停止している。つまり、MED-TV の実質的な活動期間は 5 年で終わってしまっている。本稿が着目する MED-TV にみられる越境的で分断横断的な特徴は、以下の三点にまとめられる。

一点目に、MED-TV はロンドンに設置された事務局を中心に、ブリュッセル、ベルリン、ストックホルムをはじめとした多くのスタジオによって構成されており、組織自体が越境的なネットワークを基盤にしているといえる（Hassanpour,1998:53, 2003:81）。

二点目に、MED-TV における使用言語の特徴を整理したい。MED-TV では、クルマンジー語を中心に、ソラニ語やザザ語などのクルド語方言に加え、トルコ語、ペルシア語、アラム語、アラビア語などが使用されており、きわめて多言語的な構成となっている（Hassanpour,1998:56; Romano,2002:141）。このような多言語的なメディアの構成は、印刷メディアや視覚を中心としたメディアにおいては、相互理解という意味できわめて困難であり、テレビという視聴覚的なメディアにおいてはじめて可能となる特徴であるといえる。

三点目に、MED-TV は討議の「場」としての「公共圏」の機能を備えていたといえる。たとえば、MED-TV では、時事問題に関する議論や、それぞれの指導者による討論、さらに一般視聴者との電話での討論なども行われている（Hassanpour,1998:56, 2003:81）。しかし、ここで注目すべき要点は、そのような政治的討議が分断横断的な「場」において行われているということである。つまり、各国家において個別的に展開されてきた「クルド問題」が、公開性のある「場」において討議されているということが重要であると考える。

しかしながら他方で、越境的に展開されるメディア空間は「クルド人」の専有物ではないことも確認しておきたい。端的には、クルド系の衛星テレビに先行して、1990 年にはトルコ系の衛星テレビの放送が開始されている。さらに、現在では TRT の他にも 11 のトルコ系チャンネルが存在しており、メディア空間の編成はクルド系のメディアよりもトルコ系のメディアの方が数量的な意味で優位を占めているといえる（Aksoy and Robins,2000=2004）。

また、Faist や Aksoy と Robins は、メディア空間の多様性や複数性だけでなく、受容の多様性や複数性についても考察している（Aksoy and Robins,2000=2004:378-89, 2003:93-103; Faist,1999:62-6）。つまり、彼ら／彼女らはトルコ、クルド、ドイツといった複数のナショナルな境界に位置していると同時に、それ以上に多元的な空間の中に帰属し、空間横断的に思考しているのである。

３－２．インターネットを媒介としたネットワークの形成とサイバースペースの登場

分断横断的なメディア空間の創出に MED-TV が与えた影響を指摘する一方で、今日の「クルド人」にとって主流なメディアは衛星テレビからインターネットへと移行している。たとえば、ストリーミング放送にみられるように、衛星テレビの機能はそのままインターネット・テレビという形で統合されており、その意味でインターネットはこれまでにない総合的なメディアとして

位置づけられるといえる。以下では、インターネットの特徴を簡単に概観した後、分断横断的なメディア空間としてのインターネットの可能性について考察する。まず、メディアとしてのインターネットの特徴は、次の三点に要約される。

一点目に、コミュニケーション・メディアとして考えた場合、インターネットの最大の特徴は、時間的・空間的に縮減された緊密性にもとづく直接性、近接性、双方向性である。このような特徴を生かしたCMC（Computer Mediated Communication）は、ホームページ、E-mail、電子掲示板（BBS）、メーリングリストといったさまざまな形をとり、「クルド人」同士の分断と距離を克服した活発なコミュニケーションを可能としている（Bruinessen,1998:48）。

二点目に、CMC の構造的な特徴として、電子ネットワークによって構成された脱中心的な構造であることがあげられる[11]。つまり、インターネットの構造的な特徴は、接続できる限りにおいて、偏在性や周辺性が存在せず、原理的にはすべてのユーザーに同等に開かれている点である。さらに、メディアとしてみた場合でもインターネットは、マスメディアとしてだけでなく、プライベートメディアとしても機能しており、個人が不特定多数に対して情報を発信することをますます容易にしている。

三点目に、同じくネットワーク・メディアとして考えた場合、電子メディアであるインターネットのネットワークは、国家や領域といった制度的な枠組みを基盤とせずにある種の空間や構造を構成することを可能としているといえる。つまり、サイバースペースという空間は、国家や領土といった限定性とは無関係に創出、構成することが可能なのである。

以上にあげた三点の特徴は、CMC ないしサイバースペースの越境的で分断横断的な空間の可能性を示唆するものとして理解することができる。しかしながら一方で、Bos と Nell が指摘するのは、インターネットを媒介としたコミュニケーション・ネットワークと現実的なコミュニティの結びつきと両者の関係性についてである（Bos and Nell,2006）。本稿では、Bos と Nell による興味深い考察のうち以下の三つに着目したい。一つ目に、一般的にみた場合、第一世代よりも第二世代の方がオンライン・ネットワークとオフライン・コミュニティの関係は緊密であり、つまり世代間において相違がみられる（Bos and Nell,2006:202-3,212,214）。二つ目に、トルコ出身の「在外クルド人」によるインターネットの展開は、多層的に構成されてお降り、個別的な差異にも柔軟に対応しているといえる（Bos and Nell,2006:209-11）。三つ目に、基本的な特徴として、オンライン・ネットワークとオフライン・コミュニティの間には、緊密性と構造的な類似性がみられるといえる（Bos and Nell,2006:216）。しかしながら一方で、オフライン・コミュニティは出身国ごとに分離し、異なる特徴をもつため、結果としてオンライン・ネットワークにも出身国ごとの差異が反映されている（Bos and Nell,2006:216-7）。

ここまでで確認されるのは、CMC やサイバースペースの構造や「場」としての特徴が分断横断的な側面をもつ一方で、現実的な分断状況をどの程度克服しうるのかという問いは必ずしも自明ではないということである。

３－３．インターネットが可能とする分断横断的なメディア空間の新たな形式

以下では、ウェブサイトにおける言語構成に着目することで、インターネットが可能とする分断横断的なメディア空間の新たな形式について検討したい。具体的には、KRG（Kurdish Regional Government）、KDP（Kurdistan Democratic Party）、PUK（Patriotic Union of Kurdistan）、PDKI（Democratic Party of Iranian Kurdistan）、Kurdishmedia.com、KHRP（Kurdish Human Rights Project）の 6 つのウェブサイトの言語構成に着目し、考察したい。

それぞれの組織の概要について簡単にふれると、KRG、KDP、PUK はイラクにおける地方政府と代表的なクルド政党であり、PDKI はイランにおける代表的なクルド政党である。

Kurdishmedia.com は、「在外クルド人」の専門的なジャーナリストによってつくられた、もっとも影響力のあるウェブサイトの一つである。また、KHRP はロンドンを拠点とし、国際的に展開している人権組織である。大きな分類としては、KRG、KDP、PUK、PDKI は「クルディスタン」に基盤をおく組織であり、Kurdishmedia.com と KHRP は「在外クルド人」および在外空間を中心に構成、展開している組織である。

表 3　ウェブサイトにおける言語構成

	English	Latin	Arabic	Persian	Turkish	French
KRG	✓	✓	✓	✓		
KDP	✓	✓	✓	✓	✓	
PUK	✓		✓			
PDKI	✓	✓	✓	✓		✓
KurdishMedia.com	✓					
KHRP	✓				✓	

出典：著者作成

「クルディスタン」の内外を含めた 6 つのウェブサイトにおける言語構成の特徴は、以下の四点にまとめられると考える。

一点目に、一般的な特徴として、ほとんどのウェブサイトが多言語によって構成されていることがあげられる。ただし、後述するように、ウェブサイトにおける多言語の構成は、インターネットに特有の新たな形式をふまえたものであるといえる。

二点目に、インターネットにおける言語構成の最大の特徴は、英語使用率の高さである。上記以外のほとんどのウェブサイトにおいても、英語での閲覧が可能である。グローバルなメディアであるインターネットにおいて、英語の使用率が高いのは当然であるが、同時にインターネットを使用した情報の発信が「クルド人」に限らない不特定多数のオーディエンスを対象としているともいえる。

三点目に、KRG、KDP、PUK、PDKI といった「クルディスタン」における政治組織に着目した場合、多言語による構成はきわめて重要な意味をもつ。これらのウェブサイトにおける多言語の構成は、従来は個別の国家内において展開されていた政治運動の分断横断的な指向性をあらわすものとして理解することができる。つまり、政治運動自体の直接的な連帯や統合ではないものの、各国において個別的に展開されてきた政治運動は、今日では相互に分断されたものから、全体における部分的な運動としての意味と自己理解をもちはじめたといえる。

四点目に、一方で「在外クルド人」を中心として構成されたウェブサイトには、ラテン文字、アラビア文字、ペルシア文字といった「クルディスタン」で用いられている表記文字を使用しないものがあることにも着目したい。もちろん、「在外クルド人」によるすべてのウェブサイトが、これらの文字を使用しないわけではない。また、クルド語を使用しないウェブサイトが。「クルド」ということに重要な意味をおいていないわけでもない。

ただ、主たる言語としてクルド語を使用しないということは、次の三つのことを意味すると考えられる。一つ目に、少なくとも一部の人々にとって、言語の使用はコミュニケーションの合理性にもとづいて戦略的に選択するものであり、「クルド人」であるならばクルド語を使用するというナショナルな「言説」は、相対化された問題として理解されているといえる。二つ目に、クルド語を使用しないウェブサイトは、すべての「クルド人」をオーディエンスの対象としていない

といえる。たとえば、Kurdishmedia.com のような英語のみで構成されているウェブサイトは、英語を読解可能とする「クルド人」にとってのきわめて限定的な「言説」空間であるといえる。ただし、英語が読解可能な「クルド人」ということは、逆説的には一定程度の知識層を対象としているともいえる。三つ目に、「在外クルド人」のウェブサイトの多くが英語を主たる言語としているのは、彼ら／彼女らの主張がより国際的な「場」における問題提起を目的としているためであると考えられる。「クルド問題」に関する国際的な関心を集め、国際的な問題として「クルド問題」を位置づけることは、きわめて有効な戦略の一つだといえる。

以上が、ウェブサイトにおける言語構成に関する考察である。一方で、インターネットにはウェブサイトにおける多言語の構成を可能とする特有の機能が存在する。それは、言語のきりかえによって一つの内容を異なる表記文字で閲覧することができ、使用者にあわせて言語の選択を可能とする機能である。つまり、ウェブサイトにおけるコミュニケーションは、表記文字の差異を容易に克服し、同一の情報を共有することが可能であるといえる。

４．「クルド的公共圏」の創成――「公共圏」としてのメディア空間の可能性

４－１．「公共圏」と「公共性」をめぐる概念の整理

ここでは、「クルド的公共圏」の検討に入る前に、「公共圏」と「公共性」の概念をめぐるいくつかの理解と解釈について議論を整理したい。

今日の「公共圏」に関する議論において、もっとも重要で基本的な視角を提供しているのは、Habermas の『公共性の構造転換』であるといえる（Habermas,[1962] 1990=[1973] 1994）。なかでも、Habermas の示した「市民的公共性」は民主主義的な規範形成モデルとして、今日の「公共圏」をめぐる議論の中核をなすものであるといえる。ただし、今日においては Habermas の「市民的公共圏」に対する妥当と思われる批判的考察も存在するため、「公共圏」の概念は Habermas を土台としながらも新たな展開と可能性を検討する必要がある。

以下では、そのような試みの一端として「公共圏」と「公共性」を峻別し、概念の整理を行いたいと考える。Habermas によれば、「（市民的）公共圏」は、国家の公権力に対し、「公衆」として集合した「私人」が地位や階級といった属性を括弧に括り自由な討論を交わす「言説」の「場」として措定されている[12]。したがって、「場」としての「公共圏」に理念的に求められる要件は、「公開性（publicity）」と「接近可能性（accessibility）」であるといえる。もちろん、現実的には「市民的公共圏」が、「男性」と「ブルジョア」以外を排除することで成立していたという批判（Fraser,1992=1999; 佐藤,1996）はきわめて妥当なものであるが、理念的な理解に関してはかなりの部分で共有されていると考える。

しかしながら一方で、「公共性」に関しては理念と現実という問題とは別に、多様な理解や解釈とそれにもとづく「言説」が存在しているといえる。齋藤によれば、そのような「公共性」の解釈と「言説」は、次の三つに大別することができる（齋藤,2000:1-5）。一つ目に、Habermas による批判と問題提起にもかかわらず、「公共性」とはやはり国家の公権力に回収されてしまう契機をはらんだものであるといえる。「公共政策」における「公共性」や「公益性」という「言説」は、今日でもなお有効な「言説」として機能している。二つ目に、国家と市場の双方から区別される市民社会（civil society）としての「公共性」という理解があげられる。今日では、NGO や NPO に代表される一つの潮流を形成し、Habermas の「市民的公共性」に近いものとして肯定的に理解されることが多いが、その現実的な批判能力には疑問の余地が残る。三つ目に、共同体主義者が「市民的徳性（civic virtue）」のもとに言及する「公共性」　「共同性」の「言説」があげられる。特に、グローバリズムへの抵抗やポスト・モダンといった文脈のもとに、「国民共同体」としての「公民」の形成を主張する「言説」などで

ある。

以上をふまえ、「公共圏」と「公共性」をめぐる議論において重要と思われるのは、具体的な「言説」の「場」における有為ないし無為の排除に対して常に自覚的であることであると考える。ある「言説」の「場」が形成されたとき、その「場」に「接近可可能」な資源をもつ人々とはどのような人なのか、参加資格の有無ではなく参加資源の有無によって排除されている人々はいないのかといった自省的な問いによって、個別的な「公共圏」の具体的な様態を明らかにすることが重要である。

４－２.「対抗的公共圏」としての「クルド的公共圏」

ここまで、「クルド人」にとっての「公共圏」の不在と分断ないし支配的な「公共性」からの排除という文脈のもと、「在外クルド人」の展開と分断横断的なメディア空間の登場について考察してきた。以下では、越境的なメディア空間の登場を「クルド的公共圏」の一端として位置づけ、Fraser による「対抗的公共圏（counter publics）」（Fraser,1992=1999:）という理解のもと、その可能性について検討したい。ここでの議論は、大きく分けて次の二つである。一つは、「クルド人」にとって「対抗的公共圏」という形での「クルド的公共圏」の形成が有効な戦略であることを明らかにすることである。もう一つは、越境的なメディア空間がそのような「クルド的公共圏」として位置づけられるのかを検討することである。

まず、「対抗的公共圏」としての「クルド的公共圏」の有効性について考察したい。Fraser は、Habermas が「自由主義的な公共圏を理想化するだけでなく、そのほかの非自由主義的で、非ブルジョア的な、競合するさまざまな公共圏を検証できていない」（Fraser,1992=1999:126）ということを指摘している[13]。さらに、歴史的には「市民的公共圏」以外にも、多様な「公共圏」が競合する形で多元的に存在していたことを強調している（Fraser,1992=1999:127-9）。

その上で Fraser が指摘するのは、「公共圏」からの排除や支配的な「公共性」を共有ないし享受できないマイノリティにとって、下位の「対抗的公共圏」を形成することが一つの戦略として有効であるという主張である（Fraser,1992=1999:137-9）。そのような理由として Fraser は、排除ないし従属的な関係におかれたマイノリティにとって、「単一の、包括的で、全体を覆うような公共性よりも、多元的に競争しあう公共性を調整する編成のほうが、参加における同格性の理念をさらにうながしていく」（Fraser,1992=1999:137）ことを可能にするということをあげている。「対抗的公共圏」を形成することの有効性は、競合する支配的な「公共性」から「公共圏」を簒奪することではない。「対抗的公共圏」という形で討議の「場」と機会を用意し、議論を拡大することで、支配的な「公共圏」における議論と「公共性」の再編成を迫ることを可能とすることであるといえる。

このような意味で、「クルド人」が各国において支配的な「公共圏」の中で討議や支配関係の改善をはかっていくよりも、「対抗的公共圏」を形成し問題提起をしていくことの方が有効であるように思われる。

では、本稿で考察してきたような越境的なメディア空間は、そのような「対抗的公共圏」として理解され、位置づけることができるのであろうか。特に、CMC やサイバースペースといったインターネットを媒介とした社会関係は、今日においてどの程度の有効性をもつといえるのであろうか。このような問いに対し Calhoun は、インターネットに代表される情報技術の革新を、「間接的社会関係」を強化、促進するための補足物として理解することの重要性を指摘している（Calhoun,1998:382）。また、Bohman は CMC とサイバースペースの登場が、対話と討議の機会を拡大するのにきわめて重要な貢献をもたらしたことを強調し、CMC とサイバースペースに「公共圏」としての可能性を検討している（Bohman,2004:133-9）。

さらに、より具体的な成果の一端として、Yavuz はトルコにおけるテレビを中心としたメディ

ア空間の編成が、トルコ全体を包括するような「場」において「クルド人」をめぐる議論の拡大に寄与していることを指摘している（Yavuz,[1999] 2003）。また、Olsen は衛星テレビや CMC およびサイバースペースといったメディア空間の登場が、「クルド的公共性」を討議する「場」や契機として機能していることを指摘し、「公共圏」としての意味あいをもっていると考察している（Olsen,2001）。

５．結びにかえて――「対抗的公共圏」としての「クルド的公共圏」の課題

ここまで、越境的なメディア空間の登場が（特に、インターネットを媒介とした CMC とサイバースペースが）、支配的な「公共圏」に対する「対抗的公共圏」である「クルド的公共圏」の可能性として位置づけられることを考察してきた。以下では、そのような「クルド的公共圏」が内包する問題と今後の課題について検討したい。

まず、「クルド的公共圏」が内包する問題とは、端的には排除と支配関係に関する問題であるといえる。つまり、本稿でも指摘してきたように「公共圏」とは有為と無為にかかわらず、ある種の排除の契機を孕んでいるといえる。「クルド的公共圏」が、ある種の戦略的な行為として成功するとしても、そこには「クルド人」ではない人が排除され、「クルド人」内部の差異が隠蔽される可能性を含んだものであることに自覚的である必要がある。ここでの準拠点は、「公開性」と「接近可能性」および「公共圏」の多元性である。

次に、「対抗的公共圏」の創出にともなう新たな課題について簡単にふれたい。「クルド的公共圏」の形成を考えた場合に、もっとも現実的な課題として検討すべき問題は、多元的に存在する「公共圏」の競合に関してである。「クルド的公共圏」にいて形成された討議や合意ないし規範が、トルコ、イラク、イランにおける支配的な「公共圏」との関係性の中で、どのように共有ないし同意を獲得するのかはきわめて困難な今後の課題であるといえる。少なくともこれまでの経緯をみる限りにおいては、トルコ、イラク、イランにおける支配的な「公共性」はやや柔軟性を欠くもののように思われる。また、このような「公共圏」の競合の中で、「クルド的公共圏」の志向性にも留意する必要がある。つまり、「公共圏」同士の競合の中で、場合によっては「クルド的公共圏」自体が、反民主主義的で、反平等主義的で、急進的な志向性をもつ可能性があるという問題である。

＜注＞

(1) 本稿において「在外クルド人」とは、「クルディスタン」を分割するトルコ、イラク、イラン、シリアの各国家の外部に居住する「クルド人」を指すものとする。「クルド人」は、自らの国家をもたないため、（「クルディスタン」の内部・外部という意味での）国内・国外という表記は適切ではない。また、各国家内における「クルド人」は、必ずしも「クルディスタン」に定住しているわけではなく、現在では各々の国家内で「クルディスタン」の外部に居住していることもめずらしくない。また、本稿における「在外クルド人」の定義は、個別の移動理由に配慮しない。特に、自発的移動または非自発的移動であることを問わない。

(2) 一方で、「クルド人」の正確な人口把握を困難にするもう一つの理由として、自己理解と自己表象に関する問題を指摘することができる。つまり、分断された各国家において抑圧と差別にさらされてきた「クルド人」が、どのような自己理解ないし自己表象をするのかは選択的で戦略的なものであるといえる。

(3) 特にトルコにおいては、「クルド人」は「山岳トルコ人」と位置づけられ、存在そのものを否定され、同化の対象として激しい弾圧や抑圧と差別を受けてきた。

(4) アイユーブ朝の創始者である Saladin は、「クルド人」であるとされている。

(5) トルコ人移民労働者の中に占める「クルド人」の正確な数値や割合を算出することはできないが、1950 年代後半から 1960 年代初頭にかけての初期の労働移民がトルコ西部の出身だったのに対し、1960 年代中ごろから 1970 年代にかけての移民がトルコ東部のアナトリア地方などの「クルディスタン」地域出身だったことを考えると、かなりの数と割合の労働移民が「クルド人」であったと予想される（Bruinessen,2000）。
(6) PKK は、トルコにおける代表的なクルド政党。時に過激なテロ活動を展開するなど「クルド人」の内外からも批判を受けているが、1980 年代以降に急速に支持を集める。1990 年代以降は、現実路線への修正もみられたが、今日ではまた過激な活動を活発化させている。
(7)本稿でいうところのコミュニティとは、いわゆる地域コミュニティ（local community）であり、居住をベースとする集団／共同体を指す。
(8) Wahlbeck によれば、イギリスにおける「クルド人」の 2/3 はトルコの出身であり、少なくとも全体の 90%以上がロンドンに居住している（Wahlbeck,1999:73-4）。
(9) ただし、Bruinessen によれば、クルド語による十分な教育が行われているのはスウェーデンとデンマークにおいてのみである（Bruinessen,2000:13-4）。
(10) たとえば、Izady は共通語（Lingua France）の可能性について検討している（Izady,1988）。
(11) Urry も指摘するように、ネットワーク的な構造というのは、今日の社会の構造を理解する上で、きわめて重要な視角であるといえる（Urry,2000=2006）。
(12) また、今日ではより広義な意味においては、「公共圏」は可能性の空間という意味あいで用いられているようにも思われる。
(13) 佐藤も同様に、「市民的公共性」とは異なる「ファシスト的公共性」の存在を指摘し、非自由主義的な「公共性」のモデルを提示している（佐藤,1996）。

＜文献＞

Aksoy, A. and K. Robins, 2000, “Thinking across Spaces: Transnational Turkish Television from Turkey,” *European Journal of Cultural Studies*, 3(3): 343-65.（＝2004, 門田健一訳「空間を横断して思考する――トランスナショナルなトルコ系テレビジョン」テッサ・モーリス＝スズキ・吉見俊哉編『グローバリゼーションの文化政治』平凡社, 359-92.）

———, 2003, “Banal Transnationalism: The Difference that Television Makes,” K. H. Karim ed., *The Media of Diaspora*, London: Routledge, 89-104.

Bohman, J., 2004, “Expanding Dialogue: The Internet, the Public Sphere and Prospects for Transnational Democracy,” N. Crossley and J. M. Roberts eds., *After Habermas: New Perspectives on the Public Sphere*, Oxford: Blackwell Publishing, 131-55.

Bos, M. V. D. and L. Nell, 2006, “Territorial Bounds to Virtual Space: Transnational Online and Offline Networks of Iranian and Turkish-Kurdish Immigrants in the Netherlands,” *Global Networks*, 6(2): 201-20.

Bruinessen, M. V., 1992, *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London: Zed Books.

———, 1998, “Shifting National and Ethnic Identities: The Kurds in Turkey and the European Diaspora,” *Journal of Muslim Minority Affairs*, 18(1): 39-52.

———, 2000, “Transnational Aspects of the Kurdish Question,” *Working Paper, Robert Schumen Centre for Advanced Studies, European University Institute*, Florence.

Calhoun, C., 1998, “Community without Propinquity Revisited: Communications Technology and the Transformation of Urban Public Sphere,” *Sociological Inquiry*, 68(3): 373-97.

Emanuelsson, A. C., 2005, *Diaspora Global Politics: Kurdish Transnational Networks and Accommodation of Nationalism*, Göteborg: Göteborg University.

Faist, T., 1999, “Developing Transnational Social Spaces: The Turkish-German Example,” L. Pries eds., *Migration and Transnational Social Spaces*, Aldershot: Ashgate, 36-72.

Fraser, N., 1992, “Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy,” C. Calhoun ed., *Habermas and Public Sphere*, Cambridge: MIT Press, 109-42.（＝1999, 新田滋訳「公共圏の再考――既存の民主主義批判のために」山本啓・新田滋訳『ハバーマスと公共圏』未来社, 117-59.）

Griffiths, D. J., 2002, *Somali and Kurdish Refugees in London: New Identities in the Diaspora,* Aldershot: Ashgate.

Habermas, J., [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu Kategorie der Bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.（＝[1973] 1994, 細谷貞雄訳『公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての探求』未来社.）

Hassanpour, A., 1992, *Nationalism and Language in Kurdistan, 1918-85*, San Francisco: Mellen Research University Press.

———, 1998, “Satellite Footprints as National Borders: MED-TV and the Extraterritoriality of State Sovereignty,” *Journal of Muslim Minority Affairs*, 18(1): 53-72.

———, 2003, “Diaspora, Homeland and Communication Technologies,” K. H. Karim ed. *The Media of Diaspora*, London: Routledge, 76-88.

Izady, M., 1988, “A Kurdish Lingua Franca?,” *Kurdish Times*, 2(2): 13-24.

———, 1992, *The Kurds: A Concise Handbook*, Washington: Crane Russak.

Mostyn, T. ed., 1988, *The Cambridge Encyclopedia of the Middle East and North Africa*, Cambridge; New York: Cambridge University Press.

Natali, D., 2005, *The Kurds and the State: Evolving National Identity in Iraq, Turkey, and Iran*, New York: Syracuse University Press.

Olsen, I., 2001, “Broadcasting & National Identity in a Non-state Nation- Kurdish Media & the Importance of Cyberspace”
（http://www.kurdishmedia.com/reports.asp?id=340, 15 July 2007）

Olson, R., 1989, *The Emergence of Kurdish Nationalism and the Sheikh Said Rebellion, 1880-1925*, Austin: University of Texas Press.

O’Shea, M., 2004, *Trapped Between the Map and Reality: Geography and Perceptions of Kurdistan*, New York; London: Routledge.

Romano, D., 2002, “Modern Communications Technology in Ethnic Nationalist Hands: The Case of the Kurds,” *Canadian Journal of Political Science*, 35(1): 127-49.

齋藤純一, 2000,『公共性』岩波書店.

佐藤卓己, 1996,「ファシスト的公共性――公共性の非自由主義モデル」大澤真幸他編『岩波講座現代社会学 24　民族・国家・エスニシティ』岩波書店, 177-92.

Sheikhmous, O., 1990, “The Kurds in Exile,” K. Fuad, F. Ibrahim and N. Mahwi eds., *Year-Book of the Kurdish Academy*, Ratingen: The Kurdish Academy, 88-114.

Urry, J., 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, New York: Routledge.（＝2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学――移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.）

Wahlbeck, Ö., 1998, “Community Work and Exile Politics; Kurdish Refugee Association in London,” *Journal of Refugee Studies*, 11(3), 215-230.

———, 1999, *Kurdish Diasporas A Comparative Study of Kurdish Refugee Communities*, New York: St. Martin's Press.

White, P. J., 2000, *Primitive Rebels or Revolutionary Modernizers?: The Kurdish National Movement in Turkey*, London; New York: Zed Books.

Yavuz, M. H., [1999] 2003 "Media Identities for Alevis and Kurds in Turkey," D. F. Eickelman and J. W. Anderson eds., *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere*, Bloomington: Indiana University Press, 180-99.

ウェブサイト

Council of Europe, http://assembly.coe.int/default.asp
The Cultural Situation of the Kurds, 7 July 2006.
http://assembly.coe.int/Main.asp?link=/Documents/WorkingDocs/Doc06/EDOC11006.htm

KDP, http://www.kdp.se/

KHRP, http://www.khrp.org/

KRG, http://www.krg.org/

KurdishMedia.com, http://www.kurdmedia.com/default.aspx

PKDI, http://www.pdki.org/index.php

PUK, http://www.puk.org/